

平出順益の『代睡漫抄』から窺える抜粋抄録と大惣本の貸出

デイラン・ミギー

〔1〕はじめに

本論文は幕末名古屋の医家、平出順益（一八〇九～一八六二）が天保期間中に著した備忘録『代睡漫抄』を取り上げ、本作品における数多くの元禄期の文学作品からの抜粋をもとに平出の元禄文化研究について一考察を試みる。また、その研究を可能にした商業貸本屋、大惣との関係に着目し、『代睡漫抄』と大惣書籍目録の比較対象を通して、平出による大惣本貸出のを明かすデータを図化する。

〔2〕平出順益の読書慣行について

幕末名古屋の医家、平出順益（本姓は杉江、名は延齡、字は修甫）は文化六年（一八〇九）に熱田神宮の近辺に生まれ、若い頃から

医師の山崎菜茹（一七七三～一八二八）のち尾張徳川家の藩医、浅井貞庵（一七七〇～一八二九）の元で漢方医学を学び、文政十二年（一八二八年）に平出家の養子となった。天保十四年に藩主に命じて一段席となり、安政三年にご用懸締方、同五年に御用人支配となる。（注1）真面目な医師として評判があり、『尾張名古屋当時流行大角力見立』では「本堂」（漢方の内科）の項目で高く評価されている。（注2）

医学のみならず、漢学、国学、物語文学に及んで博識を有する平出は、盛んなる幕末名古屋の文化サロンで顕著な存在となった。尾州藩医も柴田承慶（一七九四～一八六八）が率いる狂歌連に参加し、また「耽古連八天狗」と呼ばれた趣味家の集まりなどへの参加を通して数多くの文人墨客と交わった。医師が多く属していたこの交遊圏では、医学書、漢籍、狂歌集など多種の書物が回覧され、切磋琢磨する仲間としてその間内容について情熱的に議論を行うことが当時の文献から分かる。例えば同じ「耽古連八天狗」

のメンバーとして平出の友人になった尾張藩の陪臣、小寺玉晃（一八〇〇～一八七八）が著作した自筆本『人物図会』では、平出が画中人物として現れる挿絵があり、この絵では書籍の山に囲まれた平出は、狂歌師の柴田承慶とその弟子（兼ねて養子）の永坂周二（一八〇八～一八六七）と談話する場面が描写される。（注3）文人仲間によって「奇人」と称する平出は、当時のサロンにおいて熱狂的な読者および蒐書者として知られた。名古屋の藩士、細野要齋（一八一～一八七八）が『諸家雑談』でいうように「平出順益当年三十八歳納屋町に住す御目見広く書籍をあつむ。一奇人也。」（注4）そして平出の墓石碑文にも彼の熱狂的な読書と収書の嗜好が示唆される。

修甫（平出順益）無他嗜好、唯読書之嗜、雖門多疾、得寸余暇則必引書讀之、五行俱下、而能記其大意、最富藏書、自史子百家、至國籍舶來之書、及小説野乘、世間所希有者、並貯不遺、積充數十櫃、皆修甫生涯拮据購案所以獲也。（注5）

平出家の養子となる頃よりかなり早い時期から読書を兼ね合わせて収書しはじめたと察される。まだ二十代前半の頃、天保初期に完成した『涉獵書目』では、室町・江戸初期の物語草紙の約八十部から抄録することにより、その相当な読書量が把握できる。（注

6）なお、書物を繙く過程で覚えるべき個所を一つ一つ丁寧に書き抜きすることは読書慣行の一面を占める。娯楽を目的としてではなく、平での読書は学問的な衝動に刺激されたといえよう。『涉獵書目』の他に雑記ないし備忘録の形式で集めた抜粹抄録集が幾つか現存する。例えば、天保四年執筆の『普救堂漫筆』では、医書の抜粹や浮世草子等から病症や治療についての抜粹を数百項目までに及んで抄録する。（注7）医学面から文学を解釈する傾向を仄めかす面白い資料である。しかし、『普救堂漫筆』を完成する頃は、もつと野心的な備忘録をすでに執筆しはじめていた。

【3】『代睡漫抄』の抜粹抄録について

平出の備忘録の中で最も大規模を誇るのは、名古屋市蓬左文庫所蔵の『代睡漫抄』と題する十五卷十五冊までに及ぶ手稿本（大きさは縦二六・六センチメートル、横一八・五センチメートル）である。第一輯の奥書には、「天保三年癸巳三月下潮」とあり、最終巻末には「嘉永三年庚戌冬十二月六日夕於快活楼上孤灯下抄録了」とあるから、平出が二十代から四十代にかけてはほぼ十九年間にわたる作業と考えられる。（注8）数年前に執筆した『涉獵書目』と対照しては、部類を問わず江戸初期から後期にかけて五

三二部の書籍を抄録する膨大な備忘録となる。また『普救堂漫筆』と比べては、医学面からではなく、文化史学面からの趣が特色的である。全体として『代睡漫抄』は天保期より約一五〇年前に遡る元禄期（一六八八〜一七〇四）に焦点を当て、当時流行していた服装、髪型、俳諧、音楽、遊び、食文化、習慣などを巡る大衆文化を対象とする。因みに平出は文化サロンの「耽古連八天狗」の一人として古書や骨董品を鑑賞することが趣味だったが、その意味では、『代睡漫抄』も同じ延長線上に置いてよからう。また、元禄文化・文学に対して考証学的方法論を用いる方式に鑑み、『代睡漫抄』を執筆しはじめる時期に読んでいた曲亭馬琴の『蓑笠雨談』（享和三年刊）と山東京伝の『骨董集』（文化一〇〜一二年刊）の影響を受ける可能性が十分考えうる。（注9）ただし、馬琴と京伝の随筆と違って、『代睡漫抄』が抜粋のみが記し、各々の典拠の作家、刊行年のような書誌学的情報以外は、註釈が一切ない。資料に対する意見や評価については不明である。従って『代睡漫抄』を「随筆」或いは「雑記」というよりも「備忘録」と称した方が適切と思われる。

『代睡漫抄』の内容と方式を明かすように、第二輯における井原西鶴の没後刊行の作品『西鶴織留』（元禄七年刊）からの抄録を具体例として挙げられる。幸いな事にこの書籍の入手事情について詳しい記述が残る。平出が天保四年、元日より執筆しはじ

めた日記、『癸巳日疏』によると、一月七日に名古屋の貸本屋、大野屋惣八（大惣）から『西鶴織留』を借りた。（注10）天保期間中、納屋町から伏見町、のちに長嶋町一丁目に転宅する平出にとっては、近くの長嶋町五丁目にある大惣は、彼の元禄研究を大きく支える機関となった。ましてや大惣本なくして『代睡漫抄』のような大規模な抜粋抄録集が成り立たなかったといっても過言であるまい。『代睡漫抄』の執筆期間中におよそ四〇〇点弱の大惣本を参考にしたことが考えゆる。貸出希望の図書が大惣の在庫がなかった場合は、名古屋にある小規模の貸本屋（本清等）から借りることがあった。

平出が天保四年一月七日に貸出した旧大惣本の『西鶴織留』は現在、京都大学付属図書館に所蔵される。（注11）状態がとも奇麗で、人に読まれた気配が殆ど残らない。しかし、『代睡漫抄』において『西鶴織留』からの五点の抜粋を考察してこの作品のどの部分が彼の興味を惹かれたか分かる。下記の抜粋が示すように抄録の対象となるのは、元禄期の服装（帯、烏帽子）、職業（釜磨き、猫の蚤とり）そして物の値段などを巡る部分であった。

▼ 『西鶴織留』の序文からの抜粋抄録

〔〇西鶴織留元禄七年印本西鶴作團水の序に西鶴生涯のうち

述作する所の假名草紙棟に充牛に汗して世にはびこる中に日本永代蔵本朝町人鑑世の人心これを三都の書と名づくは商職の関するに日用世をわたるたつきにこころを得べき龜鑑たるべきものにして永代蔵ハ其功なりて後町人鑑世の人心半書遺して過ごし酉の葉月に此世を去りぬ」

▼ 『西鶴織留』 卷一からの抜萃抄録

「○同書卷一^{丁十四}「我等もふだんは花色染のもめんきる物に紬の帯一筋にて姿を作り嫁取振舞の時も浅黄にちらし菊の絹の物、しゅちんの帯に紫革足袋にて花をやりしに」

▼ 『西鶴織留』 卷二からの抜萃抄録

「○同書卷二^{三十五}「○同書卷二^{三十五}すぎし年の師走に、竈の上塗を仕にまはるを、手まはしりのよき事と思ひしに、又ことしの暮れには、達者なる男が釜みがきかきにありきける。大釜五文、其外は大小によらず二文づづ也。又餅米あらひ賃、壺、式文にて埒の明事、手前に人をもたぬ者は勝手よし。また表具屋の隙なる細工人と見えて、定木・竹べら・はけ・糊迄を持って、お座敷の腰張一間を壺文、あかり障子一枚二文、何行灯にても壺文にて、さ

うぢまでいたしける。年徳棚を買ければ、釣木、釘まで持きたりて、え方をあらため、釣て帰りぬ。何にても自由なる世時になりける。是等は世帯の事にて、中より下の人のためにもなりぬ。又五十ばかりの男、風呂敷をかたにかけて、猫の蚤蚤を取とましよと聲立てまはりける。隠居がたの、手白三宅をかはゆがらる、人、「取れ」とて頼まれけるに、一疋三文づづに極め、名誉に取ける。先猫に湯をかけて洗ひ、ぬれ身を其ま、狼の皮につゝみてしばし抱きけるうちに、蚤蚤どもぬれたる所をうたてがり、皆おふかみの皮に移りけるを大道へふるひ捨てる」

▼ 『西鶴織留』 卷四・一からの抜萃抄録

「○同書卷四^丁云烏丸に烏帽子折は年ふりたる事にて、伊勢神楽のくわんじん祢宜・鹿島のことふれ、あたままゑぼし被ほどの者はしらぬといふ事なく、ありきやうがり、舞まひまでも、入用の時は爰に行て、是をととのへければ」

▼ 『西鶴織留』 からの抄録卷四・二からの抜萃抄録

「○同^{七丁}天満天神に掛たてまつり大森彦七が絵馬、山本文右

衛門が筆勢、大きに出来物」と沙汰しければ、彼医者十面作りて、「いづれもお気が付ますまい。あの彦七にひとつのあやまり有。掛烏帽子の緒を書き落したり」といふ。皆々手を拍て、「さりとは、こまかに見とがめられし事ぞ」と此評判やむ事なく、其後さる大医にたづねしに、「畫師も物をしらねばならざる事かな。彦七が時代までは、髪にしこの緒を付て留ける。かけ糸ほうしに緒を付初しは、百年此かた」と物語いたされしに、「是はく」と、各々又手をうちける。惣じて絵馬は万人の目にか、れば、かりそめながら大事な物なり。都の清水に長谷川藏が筆にて、五郎朝比奈が力くらべを書り。此袴のまちのひだ折たる上に心もなく舞鶴の紋がら書たる所、猪熊の染物の下女が見出して、洛中沙汰になり、長藏一生、是をわづらひけるとなり。又祇園のやしろに、火ともしの大男、雨の夜麦わらの笠着てかよふを、化物といひふらせしを、平忠盛くみとめ給ふありさま、別所権右衛門が書ける。「大男の手より取落したる土器の割ども、取集めたらば、四五枚ほどもあるべし、是はやまり」と、稲荷の前なる土鈴の細工人が見出して、是も沙汰せし時、物に心得有人のいへり、「紋鶴とは、各別の僉義なり。其火ともしの男、かはらけ五枚持たる事もあるべし。むかしの事を今、其男に問れもせず」と、大笑ひして果たしける。」(注12)

この五点の抜粋以外は、何も記されない。西鶴や『西鶴織留』についての感想が不明である。備忘録方式に筆者の覚えたい部分だけが抜き書きされるが、元禄期の物質的文化との関わり以外は、抜粋の関連性や共通点が分かりにくい。

『西鶴織留』から抄録する部分ですべて文章となるが、他の書籍から抄録する場合は、文章のみならず挿絵もなぞることがある。平出の抄録方式の特徴としては注目に値する。例えば『西鶴織留』とほぼ同じ時期に貸本屋大惣から借りた『人倫訓蒙図彙』(図1参照)の一抜粋では、「乳子買」という職業についての説明文とともに典拠からの挿絵もそのまま描き写す(図2参照)。また貞享四年間の往来物『女用訓蒙図彙』からの抄録では一六種類の髪型を綿密になぞる(図3参照)。合わせて『代睡漫抄』の十巻中で典拠の挿絵からの写しは訳七〇箇所に及ぶ。馬琴の『蓑笠雨談』と京伝の『骨董集』にも見られるこの特徴は、元禄期の浮世草紙、重宝記、往来物などの書籍を参考にして過去に流行った髪型など失われた物質的文化への探求を語る。



図3 平出順益の手による『女用訓蒙図彙』からの書き写し



図2 『代睡漫抄』の平出順益の手による書き写し



図1 『人倫訓蒙図彙』の挿絵

【4】『代睡漫抄』と大惣本の貸出

天保四年から五年にかけて執筆しはじめた破片的な日記、『癸巳日疏』の天保四年正月元日から七日にかけての記入項目では、大惣本の貸出に関する記述が四ヶ所ある。

- 天保四年癸巳正月元日「○殺生後日怪談五編ヲ馬琴作大惣ニテ借読ス」
- 二日「○蓑(馬琴随)笠(筆ナリ)雨談ヲ大惣ニテ借ル」
- 四日「○大惣ニテ骨董集初篇飛鳥川当流男ヲカリル」
- 七日「○大惣ニテ西鶴織留ヲ借ル」

この五点の大惣本については、これ以上詳しい記述は『癸巳日疏』中に見えないものの、同じ時期に執筆しはじめた『代睡漫抄』第一巻と比較対照を行って、五点中三点の書籍、曲亭馬琴作の随筆『蓑笠雨談』、秋花堂久澄作の浮世草子『飛鳥川当流男』(元禄一五年刊)、それから井原西鶴没後刊行の浮世草子『西鶴織留』(元禄七年刊)が両者で取り上げられることが明らかになる。また、『代睡漫抄』のみでは、同じ七日間の間に借りた大惣本が二点示唆されるので、両者を比較対照しなければ、平出の貸本借覧事情の全体像が窺えないことが分かる。

『代睡漫抄』で引用される五三二点の作品の題目、刊行年などのデータを目録化した。そして、書籍を大まかに十三項の部類に分けて、『代睡漫抄』各巻に提供する書籍データによって縦棒グラフを作成した(表一参照)。グラフに示すように抜粋引用の典拠となった書籍が多岐にわたる。中で俳諧が 一三二点(全点の24.8%)で最も多く、文化期以前の大衆文学が 一三〇点(24.4%)、随筆が九一点(17.1%)、雑記・雑史が四八点(9.02%)の部類に当て嵌る。約四分の一を占める俳書については、いかに入手したか不明であるが、恐らく柴田承慶の狂歌連やその他の文化サロンに参加する仲間によって回覧された物かも知れない。

次に自作の「『代睡漫抄』目録」と明治三十一年の蔵書売却にあたって作られた「大惣蔵書目録」と比較参照を行った。結果として『代睡漫抄』の五三二点の七割以上の書籍、つまり、三八九点が「大惣蔵書目録」にも表れる。因みに俳書を計算から省くと、割合が四〇〇点中三七七点、つまり九割以上となる。言うまでもなく、無条件に明治三十一年に作成された目録を六十年前に遡る天保時期の在庫状況の確認として捉えることができないが、その反面、天保時期に繁昌していた大惣の書物購入の資力、それから購入する際の新刻版に対するこだわりを鑑み、少なくとも三七七点の書籍の大半数が在庫にあった可能性が高いと推定してよから

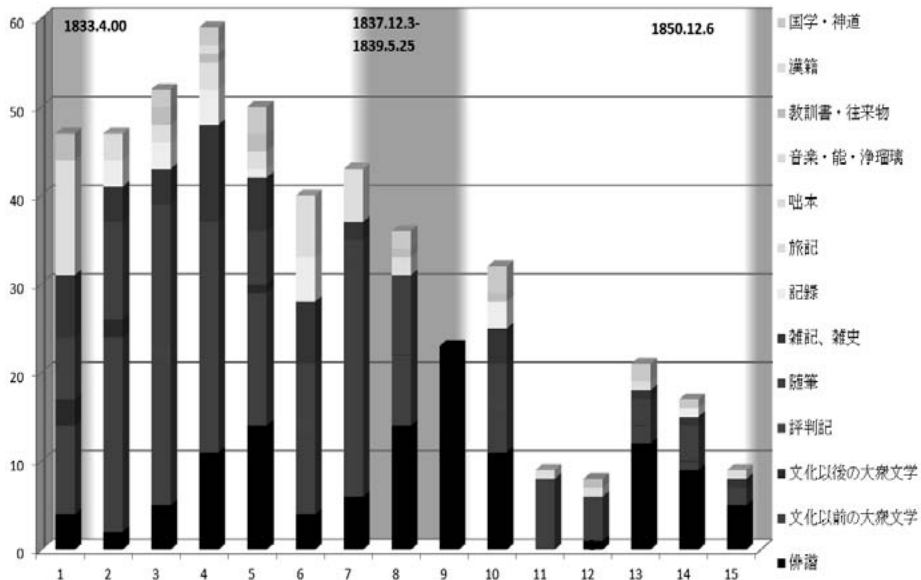


表1 『代睡漫抄』の抜粋引用の原拠となった書籍の点数と分類

う。それから平出氏宅が大惣の近傍にあったことを念頭にすれば、『代睡漫抄』の学問的作業には、大惣本が大きな役割を果たしたといえよう。

【5】むすび

以上、幕末名古屋の医家、平出順益が著した『代睡漫抄』における抜粋抄録の内容と方式について考察を進め、大惣本と平出順益の学問的活動との関係について新たな研究を紹介した。今後の研究では、平出と同じ文化サロンに参加する文人が著作した備忘録等に焦点を当て、貸本屋大惣とこの文化・文学について考察を試みる。諸賢のご指摘を請う次第である。

注

- (1) 石川了「天保四、五年の平出順益・翻刻・解題「癸巳日疏」」(『大妻国文』一六・昭和六〇年)一一〇頁
- (2) 石川了「天保四、五年の平出順益・翻刻・解題「癸巳日疏」」(『大妻国文』一六・昭和六〇年)一〇六頁
- (3) 早稲田大学付属図書館所蔵『人物図会』

- (4) 細野要齋『諸家雑談』
- (5) 鶴舞中央図書館所蔵『碑叢』
- (6) 『物語草紙解題』
- (7) 『普救堂漫筆』
- (8) 名古屋市蓬左文庫所蔵の『代睡漫抄』
- (9) 曲亭馬琴の『蓑笠雨談』と山東京伝の『骨董集』
- (10) 『西鶴織留』は現在、京都大学付属図書館に所蔵
- (11) 京都大学付属図書館所蔵『西鶴織留』
- (12) 名古屋市蓬左文庫所蔵の『代睡漫抄』

付記…本稿は平成二十六年科学研究所費助成(学術研究助成基金助成金)若手(B)の課題「貸本屋大惣と近世名古屋の読書文化」(課題番号)による研究成果の一部である。調査の際にご協力、資料掲載の許可を下された蓬左文庫および名古屋市立鶴舞図書館のスタッフ諸氏に御礼申し上げます。